

タイトル	ゲーテの『親和力』について：自然,人生,愛の形成とその挫折
著者	瀬川, 修二
引用	北海学園大学学園論集, 122: 41-59
発行日	2004-12-25

ゲーテの『親和力』について

—— 自然，人生，愛の形成とその挫折 ——

瀬 川 修 二

『親和力』は1809年、ゲーテが60歳の時、出版された。この小説は1807年には長編『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に挿入される短編小説として計画されていたが、自然と膨らみ、独立した長編になった。親和力是一部、二部から構成され、それぞれ18章から成り立っている。最初にストーリーを紹介しておきたい。

一部は中年の貴族エドアルトが自分の屋敷のそばの苗木育成場で接ぎ木をしているところから始まる。エドアルトは妻シャルロッテと広い領地で幸福な生活を始めたところである。エドアルトとシャルロッテは若いとき、お互いに愛し合っていたが、結婚に到らず、エドアルトは親の言いなりになり、親の勧める年上の金持ちの女性と結婚する。シャルロッテも他の金持ちの男性にプロポーズされ、結婚する。その後、二人はそれぞれの伴侶と死別し、自由の身になり、エドアルトはシャルロッテに求婚する。シャルロッテは自分の年齢を考え、最初は拒否するが、エドアルトの熱意に負け、再婚する。シャルロッテは屋敷の向かい側にある丘陵へ行く途中に苔小屋を作り、これから晩年の安定した幸福な生活を享受しようとしている。

エドアルトは昔からの友人である大尉が現在、職がなく、困っているのを見かね、彼を自分の屋敷に呼びよせたいとシャルロッテに相談する。シャルロッテは二人だけの生活に第三者を呼び入れることに反対するが、エドアルトの強い要望に負け、同意する。シャルロッテの方もかねてから心配していた姪であるオティーリエを寄宿学校から屋敷の手伝いとして呼びたいと打ち明ける。シャルロッテは担当の助教師から手紙をもらい、実の娘のルチアーネは同じ寄宿学校ではのびのびと育っているがオティーリエは学校の教育になじむことが出来ずにいることを心配していたのである。こうして最初はエドアルトとシャルロッテの夫婦に大尉が加わる。エドアルトと大尉は男同士で仲良くなり、シャルロッテは一人さびしい想いをするが、その後、オティーリエもやってきて、四人の生活が始まる。大尉はエドアルトと一緒に領地を測量して地形図を作製し、領地の利用の仕方、近くの村の整備などを話し合う。一方、シャルロッテとオティーリエは屋敷内の家事を分担して行う。

四人は屋敷の周りの広い領地を散歩し、丘の頂上に別邸を建てること、頂上までの散歩道を作ること、三つの沼をひとつにすること、沼に栈橋や休憩場を作ること、村を通っている川沿いに堤防の道を作ることなどを計画する。四人が一緒になることが多くなるにつれ、エドアルトとオ

ティーリエ、シャルロッテと大尉の間に愛が生まれる。別邸の定礎式がシャルロッテの誕生日に合わせて行われる。エドアルトとシャルロッテの昔の友人であり、現在、不倫の関係にある伯爵と男爵夫人が屋敷を訪れ、しばらく滞在する。男爵夫人はエドアルトとオティーリエの愛に気づき、二人を遠ざけようとする。他方、伯爵は大尉の有能さを知り、もっと能力を発揮できる地位を紹介しようとする。ある夜、エドアルトは伯爵がシャルロッテの足をほめたことに刺激を受け、シャルロッテの部屋を訪れる。エドアルトとシャルロッテとはそれぞれオティーリエ、大尉を想像しながら抱擁し、想像上の二重の不倫がなされる。エドアルトは別邸の棟上げ式をオティーリエの誕生日に合わせて、性急に進めようとする。棟上げ式では花火を見るために集まった見物人たちのいる土手が崩れ、少年がおぼれそうになるが大尉が救う。エドアルトとオティーリエの愛、シャルロッテと大尉の愛は深まっていくが、思慮深いシャルロッテは大尉との愛を諦める。大尉もまた、屋敷から出て行く。シャルロッテは妻としてエドアルトにオティーリエを諦めることを要求し、オティーリエを屋敷から遠ざけようとするが、エドアルトはオティーリエを諦めようとはせずにオティーリエをシャルロッテのもとに居つづけさせる条件で屋敷から出て行く。それから、シャルロッテにエドアルトの子供が出来たことが判明し、そのことを手紙で知ったエドアルトは絶望的になり、遺言状を作成し、戦場へ志願する。大尉が自分の仕事を任せた若い建築家は別邸など残された庭園工事を続ける。

二部では前半部の章にオティーリエの日記が挿入され、日記はそれぞれの章の出来事についての考察から人生一般に関する洞察まで箴言的文章から構成されている。エドアルトと大尉が去り、屋敷に残されたシャルロッテ、オティーリエ、若い建築家の活動が二部の物語の最初を構成する。

シャルロッテが教会の墓地を壁際に移動し、新しく並び替えたことで近隣から苦情が出て、その交渉のため、法律家がやってくる。墓地を勝手に移動すると故人がどこに埋められているかが分からなくなってしまうという苦情が伝えられる。しかし、この問題は結局、建築家の弁護もあり、埋められた場所は重要ではなく、石碑、記念碑、遺品など故人を偲ぶ物が大事だということで落着く。同時に故人の肖像の話題に発展し、建築家は様々な記念碑、古代の墓標、器物の収藏品、中世の貨幣、銅版画、原画の写しなどを紹介する。建築家は礼拝堂の天井を修復するためにオティーリエと一緒に原画を元に絵を描くが、絵に描かれた人々の顔はオティーリエにそっくりな顔になる。シャルロッテの娘ルチアーネが婚約者や御付きの者たちを引き連れて屋敷にやって来る。毎日、近隣に出かけ、また夜には仮装の企てや、絵画で描かれた場面を実際に人間によって再現する活人画など様々な気晴らしを試み、屋敷の平穏な生活を騒々しくかき回す。

ルチアーネが去った後、オティーリエに好意を持つ建築家は彼女を聖母マリアにして活人画を試み、成功する。建築家が去っていくと同時にオティーリエの以前の助教師も訪ねてくる。助教師はオティーリエの活人画を神聖なものを形として表現してはいけないと批判し、人間の持つ最高のもの、優れたものは行為を通して示さなければならないと言う。助教師はシャルロッテに青少年の教育、少年と少女の教育の仕方の違い、男性と女性の生き方の違いを語り、実生活に役立

つ教育の重要性を語る。かれはオティーリエに教育について語りながら、オティーリエを自分の協力者、妻になることを遠まわしにほのめかす。その後、シャルロッテにはエドアルトとの子供が生まれるが、子供の容姿は不思議なことにオティーリエと大尉にそっくりで、まさしく、想像上の不倫が形となって現れる。一年が過ぎ、また春になり、別邸が完成する。シャルロッテとオティーリエは別邸の方に移り住み、オティーリエは一人でシャルロッテの子供の世話をする。イギリス人が同伴者と共に訪れる。イギリス人は庭園の愛好家で領地の庭園を褒め、まだまだ良くなることが出来るという。彼は自分の大きな土地を継がせようと考えていた息子がインドに行ってしまったため、自分の屋敷や土地を去り、世界を旅人としての歩き回る人生を選んだことを話す。同伴の紳士はかつて大尉と隣の娘の間に起こったと言われている「隣り合った不思議な子供たち」という短編を語る。普段から非有機物同士、有機物と非有機物の関係を調べるために金属の実験道具を持ち歩いている同伴の紳士はオティーリエに糸で結ばれた金属を持たせ、別の金属に上にぶら下げる実験を試みる。シャルロッテやイギリス貴族の場合は全然、動かないが、オティーリエが持つと糸が揺れ、渦巻き運動を起こす。エドアルトは戦場から無事に戻り、大尉(少佐に昇進)と会い、戦争を生き延びたのでオティーリエと一緒にいる資格が出来たと話す。エドアルトは強引にオティーリエとの結婚、シャルロッテとの離婚、そして少佐にシャルロッテを譲ることで話を進めようとする。少佐は時間をかけてエドアルトを説得しようとするが、エドアルトがオティーリエへの愛に固執したために諦め、了承し、屋敷に戻り、シャルロッテに話しようとする。しかし、シャルロッテは不在で会うことは出来ない。一方、エドアルトは待ちきれずに屋敷に向かい、子供と一緒に湖畔で本を読んでいるオティーリエに偶然、出会い、オティーリエと一緒にするように迫る。オティーリエはシャルロッテの同意が必要であると言い、エドアルトに帰るように言う。オティーリエはエドアルトとの再会で平静さを失い、いつの間にか日が暮れてしまったことに気づく。オティーリエは子供を抱き、早く帰らなければならないと焦って湖に小船を出そうとするが、動揺のため小船が揺れ、子供を湖に落とし、溺死させてしまう。その後、少佐がシャルロッテを訪問してエドアルトとの話し合いのことを伝えとシャルロッテは子供が死んだことを運命と考え、エドアルトとの離婚を決意する。しかし、少佐との関係は保留する。子供を殺してしまった罪悪感にとらえられたオティーリエは、自分の生きるべき道を踏み外したと考え、エドアルトのことはきっぱり、諦めることを決意する。オティーリエは再び、寄宿学校にもどることを決め、旅立つが途中の宿にエドアルトが先に行き、オティーリエを待ち伏せ、二人はまた、会ってしまう。オティーリエはエドアルトと一言も話さずに、寄宿学校に行くことはやめ、エドアルトと一緒に屋敷に戻る。屋敷に戻ったオティーリエはすぐ、エドアルトとシャルロッテの手を握り合わせ、それからは自分の部屋に閉じこもり、沈黙を続け、食べ物も飲み物もとらなくなる。助教師と会うことも拒む。オティーリエが屋敷に戻り、すべてが以前の生活の戻ったかのように見えたが、オティーリエの決意は固く、食事を取っているかのように見せかけて実際は食事せずに死んでしまう。オティーリエの遺骸は教会の礼拝堂に安置される。オ

ティーリエを慕い、オティーリエにいつも付いて回っていた女の子ナニーは高いところから飛び降り、怪我をするがオティーリエの体に触れ、奇蹟的に治る。それが噂になり、奇蹟信仰からオティーリエの遺骸のところに多くの人が集まってくる。エドアルトは絶望し、オティーリエを追うように死ぬ。二人は一緒に並んで礼拝堂に葬られる。

1. 必然と自由

当時、ゲーテがこの本を出版するとき、自己広告として述べた言葉を見てみよう。

「作者が継続的に物理学を研究してきたためにこのようなタイトルが生まれたように見える。自然科学の分野においては人間的な知識分野から遠くはなれた事柄を身近なものにするためにしばしば、倫理的な比喩を使うことに作者は気づいていたようだ。こうして彼は倫理的な問題を扱う際に逆に化学的な比喩的表現をその本来の精神的な由来へと戻したいと思ったのかもしれない。というのは、いずれの分野においても、ただ一つの自然が支配しており、明晰な理性による自由の世界においてもどうしようもない暗い情念の世界の痕跡が依然としてやむことなくうごめいており、それはより高い者の手によってのみ抹殺可能であるが、この人生においてそれはおそらく、完全に消し去ることはできないからである。」(639)

この小説のタイトル「親和力」は当時の化学理論で非常にポピュラーな化学用語で一般的にはスウェーデンの化学者ベリマンに由来するものと考えられる。ベリマンの使ったラテン語がドイツ語の *Wahlverwandschaft* (親和力) に訳された。直訳としては「選択的引力」という意味である。¹⁾ 二つの結合した要素から成り立つ物質に他の物質を近づけると、この二つの要素のうち一つはもう一方の要素から分離し、他の物質と結合する。そして新しい物質が出来る。親和力とはある物質の二つの構成要素が相手の要素との結びつきを解消し、他の物質との結びつきを選ぶ現象のことを言う。この現象を観察するとき、物質要素は人間同士の関係のように、既存の要素(相手)を捨て、他の要素(異性)を「選ぶ」ように見える。そのためにこの化学用語には選択 (*Wahl*) という言葉が入っているのである。一部4章でエドアルト、シャルロッテ、大尉の間で交わされる化学会話でこの親和力について石灰石の例で具体的に言及されている。石灰石は石灰土と炭酸ガス(弱酸)から成り立っている。石灰石の一部を希硫酸につけると石灰は希硫酸と結合して石膏になり、炭酸ガスは蒸発する。またA, B, C, Dの記号を使い、説明されている。ABから成り立つ物質にCDから成り立つ物質に触れさせるとAはDと結びつき、CはBと結びつく。この場合、二重の親和力が働いている。エドアルトは冗談でAはシャルロッテ、Bは自分、Cは大尉、Dはオティーリエにたとえる。ゲーテがこの自然界の化学物質の親和力を人間界の異性関係に応用させようとしたことは確かである。エドアルトとシャルロッテ夫婦に大尉とオティーリエが加わり、エドアルトとオティーリエの間に、シャルロッテと大尉の間にそれぞれ親和力が働き、お互いに惹かれあう。化学会話で話されたことが現実にかかる。

『親和力』は化学物質の元素の結びつきなど物質の世界と人間の世界が結局、同じ世界ではない

のか？ という疑問を投げかけている実験的小説である。物質界も人間の世界も「一つの自然が支配している」ことをテーマにした作品である。物質の世界が必然的法則に支配されているのは理解できるが、人間の世界も同じように必然的法則に支配されているのだろうか？ 人間は理性、自由意志を持ち、まさしく、自由に選び、決断し、行動することが出来るのではないかと想定するのである。

『親和力』は結局のところ、自然、運命の必然性の前で人間が無力であることを証明した作品であるように見える。確かに四人の主要登場人物は皆、愛という情念（親和力）に支配される。二組のカップルは肉体的に結ばれることはないがエドアルトとシャルロッテはそれぞれ、オティーリエと大尉を想像しながら、一夜を共にすることで、オティーリエと大尉に容姿がそっくりの子供が生まれる。子供の容姿は精神的な姦通を証明する。子供の溺死の後、聡明なシャルロッテも運命を信じ、エドアルトとの離婚に同意する。オティーリエとエドアルトの死は結局、彼らが親和力という自然の必然性、運命に翻弄された結末を表している。ゲーテは『詩と真実』でデモニッシュ（悪魔的）という言葉を使い、デモニッシュなものとは「道徳的世界秩序に対立するものではないがそれを妨害する力であり、偶然の中に、理性をすり抜ける現象の中に現れる力である」と述べている。²⁾『親和力』の世界はデモニッシュなものに支配された世界ということも出来るだろう。

しかし、一方、彼らは愛という情念に完全に操られるのではない。エドアルトは最初から最後まで情念に支配され、自分を見失っているが、シャルロッテと大尉はお互いに惹かれながら、最後には理性を保ち、倫理的に振舞っている。オティーリエは大人たちの世界で運命に翻弄されるが、死に至る倫理的決断を通してこの世での愛を諦める。彼らの倫理、理性による自由な決断は最終的には成功はしないが、それは決して無力なものとして否定されているのではない。

ゲーテは古典劇と近代劇をトランプゲームに比較している。古典ゲームでは配られたカードや敵をどうすることも出来ない。偶然の出来事は主人公の意志と関係なく、主人公を定められた運命へと進ませる。

一方、近代ゲームでは意志の力は認められる。配られたカードを無効なもの、有効なものに分け、運、不運を自分で操ることが出来る。³⁾

「人間は壊れやすい小船に乗っているが、オールを持っている。それは波の気まぐれに従うのではなく、自分の洞察力に従うためである。」⁴⁾

『親和力』に挿入された短編小説「隣り合った不思議な子供たち」は古典劇に似ている。良家の二人の男の子と女の子は両家から将来は夫婦になることが期待されている。二人は小さいころは反目し、憎みあい、両親は一緒にすることを諦める。女の子は大きくなって別な青年と婚約する。それから幼馴染の男の子が立派になり、彼女の前に現れる。彼女は幼いころの敵対心は本当は激しい愛であったことに気づく。青年は彼女の愛には気づかず、彼女は彼の冷淡さに対する復讐と

して船遊びの際に自分のことを永遠に悔恨のなかで思い出してもらうために川に飛び込み、自殺しようとする。青年は彼女を助けるために自分も飛び込み、結局、彼らは一緒に結びつき、ハッピーエンドで終わる。二人はいくら憎みあい、離れてもまた、再会し、青年の冷淡、女性の自殺の試みにかかわらず、運命が二人を最後に結びつける。この点でこの短編は古典劇に近いと言えるだろう。最初はお互いへの対抗心が二人を引き離し、最後には女性が永遠の悔恨を相手に残すために川に飛び込み自殺を試みても結局、運命が二人を結びつけ、ハッピーエンドをもたらす。

『親和力』は運命が絶対的力を発揮する意味においての古典劇ではない。人間の洞察力、意志を認めた近代劇である。また、親和力は与えられた不利なカード、気まぐれな波（運命）をオール（洞察、決断）でなんとかしようとするが、結局、失敗、挫折する点で悲劇である。

人間はいわば、運命としての波に翻弄されると同時に内面的にすでに性格的に運命づけられていることも確かである。行動する前から、人間はその生まれ、性格において、規定されていることもテーマになっている。人生には何が起こるかわからないという意味において人間の運命は外から人間を規定しているが、同時に人間がどう行動するかもその性格において内からあらかじめ規定されているのである。人間の性格は自分の生まれ育った環境によって作られ、また生まれ育つ時代の影響も受ける。

「私たちは生活に流されていながら、自発的に行動し、自分の活動と楽しみを自分で選んでいると信じています。しかし、正確に考えてみると、もちろん、それはすべて時代の計画と傾向にすぎなくて、私たちはそれを時代と共に実現させるように強いられているのです。」(417)

エドアルトは周囲のことを気にせずに、自由気ままに行動しているように見えるが、最も愛という情念にとり憑かれ、翻弄されている。彼の行動は育った環境から説明されている。エドアルトは金持ちの両親の一人っ子で小さいころから甘やかされて育ったため、わがままで自分の欲望を抑えることを知らない。最初の結婚では年上の妻からも甘やかされ、すべてのことを思い通りにすることが出来た人間である。そういう人間に育てられたエドアルトがオティーリエへの愛にとらわれ、周りを省みず、オティーリエを自分のものにしようとして最後まで諦めずに自分勝手にわがままな行動をすることは必然的である。彼は自由、気儘の様にみえても彼の性格に規定されている。彼は自分自身を冷静に判断できない人間であり、自己中心的に行動せざるをえない人間である。彼の育った環境、それまでの人生が彼をそういう人間にしたのである。彼はすべてを自分の都合の良いように解釈する。自分の欲しいものは手に入れないとすまない性格である。

シャルロッテの娘ルチアーネもエドアルトと同様に自分勝手に無軌道な振る舞いをしているが、シャルロッテは母親としてルチアーネを将来、変わりうる人間として捕らえている。

「シャルロッテはそういう性格の人々が生活や様々な出来事や両親の境遇を通して形作られ、自我の強さを和らげられ、無謀な行動に一定の方向を与えられ、愛すべき円熟した人間に成りえることを経験から知っていた。他人は面白いがるか、関わりを持たないようにと考えるが、親は希望を持つのが自然であるから、シャルロッテも母親として他人には不快に感じられることも受け入

れた。」(399)

エドアルトはすでに環境によって作られた人間であるが、ルチアーネはこれから環境によって作られる人間として見られている。人間は自由に振舞っているように見えても、結局は性格、状況、時代によって規定されている。その点で物質界と同じような自然法則が支配していると言える。しかし、ゲーテはもちろん、物質界と人間界を完全に同一化しているのではなく、ただ、共有する法則、「一つの自然」が支配していると想定している。そしてそれによって人間の自由意志、理性の全能さに疑問が投げかけられているのである。

2. 自然，人生，社会の形成，その挫折と原因

『親和力』では自然，人生，社会を秩序づけ，形成するために様々な試みが企てられる。自然，人生，社会は正しく認識され，秩序づけ，形成しなければ，無秩序で混沌のままで，結果として災害，不幸をもたらす。シャルロッテは特に人間関係がうまくいくように配慮し，大尉は人生，自然，社会の秩序形成の指導的役割を果たす。

物語の始まりでシャルロッテは屋敷の向かい側の丘の中腹に苔小屋を完成する。そこは散歩の休憩所となり，美しい景色を見渡すことができる。また，教会の横にある無秩序の墓地を移動し，教会の壁際に並べ，美しく，模様替えをする。エドアルトは大尉と一緒に周囲の領地を測量し，測量図を作成する。オティーリエが加わってからは四人での領地一周の散歩し，オティーリエの提案で山の頂上に別邸を建てることを決める。三つに分かれていた沼をひとつにする計画，湖畔に栈橋と休憩場の設置計画など周囲の自然を有効に活用し，そこに大きな美しい庭園を形成しようと計画する。このような行為は自然環境を認識し，自然を美しく，より住みやすく形成する試みである。

大尉はエドアルトのルーズな生き方を見て，仕事と趣味を区別すること，自分の一存で決めることと他人と話し合わなければならないことを分けるように忠告する。当面の問題の書類室と過去の問題の文書保存室の設置，書類の区分，老人の書記にはゆっくり仕事をさせることなど秩序のある人生を形成する必要性を説く。大尉はまた，小作地の賃貸料の割り出しを提案し，シャルロッテに対しても家庭薬の充実，近くに湖沼，河川があるために溺れたものを救助する設備，軍医の招聘など，経済，医学，安全対策の問題にも触れる。

エドアルトの領地の整備だけではなく，近くの小村の川の洪水を防ぐための対策，道路の建設，村を清潔に保つこと，村人との付き合い方，乞食など施しものの問題など社会的な観点からの村の形成も問題になる。

シャルロッテが教会の墓地を移動したことが原因で苦情が持ち込まれ，埋葬の場所と墓碑のどちらが大事なのか，故人をいかに偲ぶか，故人の肖像，死んだ人間と生きている人間の関係などが問題にされる。建築家は昔の武器や道具の収集品，デッサンなどを入れた鞆を持ち歩き，過去を保存，継承することの重要性を強調する。かれはオティーリエと共に教会の礼拝堂の修復を試

みる。オテーリエの助教師も訪ねてきて、偉大なものは形ではなく、行動を通して表さなければならぬなど教育問題を論じる。これらは故人と生きている人間の関係、過去と現代の関係をどう形成するか、また、人間をどう教育し、形成するかを問題にしている。

『親和力』は特にそのタイトルが示しているように男と女の引き合う力をテーマにしているが、新しい結びつきは同時に古い結びつきの解消、すなわち、離婚の問題を引き起こす。人と人の関係は結合だけではなく、常に不和、決裂の問題を含んでいる。人間関係をいかに形成するかが重要な問題になっている。

大尉を屋敷に呼びたいというエドアルトの考えに対してシャルロッテは悪い結果を予感して懸念を示す。

「どんな人間関係においても外部から第三者が入り込んでくることほど重大なことはありません。私は兄弟にせよ、恋人にせよ、夫婦にせよ、その間へ第三者が偶然、あるいは求められて、入り込んできたために、おたがいの関係がすっかり変わってしまい、状況が完全に悪化した例を見ていますわ。」(248)

『親和力』ではミットラーという人物が登場する。かれは昔、牧師をしていて、教区の家庭内問題や隣人との争いをすべて調停した経験があり、その後、牧師をやめ、現在は法律学を勉強し、弁護士のように人間関係の調停の仕事をしている人物である。ミットラーという言葉は仲介者を意味しているが、彼はシャルロッテとエドアルトの問題を解決するために重要な場面で現れる。

自然や人生を秩序づけ形成しようとする様々な試みは結局、挫折する。シャルロッテとエドアルトの晩年の二人きりの幸福な生活は崩壊する。棟上げ式では土手が崩れ、少年はおぼれそうになる。シャルロッテとエドアルトの子供はオテーリエと大尉の容姿に似て、湖で溺死する。ミットラーの仲介は成功しない。四人の登場人物が計画した庭園は最後にはそれを利用する人もなく、意味を失う。

「親和力は人間の欠陥、不自由、不能、挫折の物語であるように思える。なぜなら、オテーリエの人生だけが欠陥、不自由、挫折に規定されているのではなく、他の人物の行動もそうであるからである。」⁹⁾

ゲーテはもちろん、人間の欠陥、不能、挫折を人間の避けられない運命、必然性、限界として捕らえていることは確かである。一方、彼らの行動に問題点がないわけではない。

(1) ディレクタント

かれらは庭園設計、礼拝堂修復、音楽、活人画など様々な芸術的活動をするが、それは本来の専門家としてではなく、ディレクタント（素人愛好家）として活動している。シャルロッテの庭園作り、エドアルトとシャルロッテの合奏、エドアルトとオテーリエの合奏の不完全さが強調されている。礼拝堂の天井の絵も素人の建築家がオテーリエと一緒に修復し、その絵は建築家の想いを反映してオテーリエに似る。ルチアーネや建築家の活人画の試みも単なる余興、思いつきに

しか過ぎない。このように親和力の登場人物の活動は真の芸術的活動ではなく、趣味の域を出ないディレクタントとしての活動である。⁶⁾

大尉はシャルロッテの庭園作りについて言う。

「趣味でこういうことする人たちと同じく、奥さんには何かを成し遂げることもよりも何かをやっていることが大切なんです。自然をいじくりまわして、この場所、あの場所が気に入ってしまう。しかし、この障害あの障害を取り除く勇氣はない。何かを犠牲にするまでの大胆さは持ち合わせていない。あらかじめ、どんなものを作りたいかについてのはっきりしたイメージはなく、試しにやってみて、うまく行くこともあれば、失敗することもある。変える場合も多分、そのままにしてほうが良いものを変えてしまい、反対に変えた方が良いものをそのままにしてしまい、つまり、ちょっと気に入るとか気が利いているなという感じのものは得られても、本当に満足できるものは出来上がらない。」(260)

建築家の礼拝堂の天井の絵の修復はただ、昔の原画を模倣している。活人画の試みも絵画の芸術性を人間を通して再現するのではなく、ルチアーネの気まぐれ、建築家のオティーリエへの想いの表現に過ぎない。ミットラーも専門の弁護士として人間同士のいさかいを調停しているのではなく、単なる素人のお節介者として活動している。

(2) 性急さ、時間を忘れる

ディレクタント活動以外に彼らの性急さが強調されている。⁷⁾ 登場人物は物事を良く考えずに、性急に事を運ぼうとすることが目立つ。この性急さは特にエドアルトの行動を特徴づけている。彼はすぐに大尉を呼びたがり、シャルロッテに反対され、いらいらする。別邸の棟上げ式をオティーリエの誕生日に合わせて性急に進めさせ、見物席の土手が崩れる事故が起きても花火を打ち上げさせる。オティーリエが学校で性急な授業の進め方からは何も学べない、と助教師の手紙にも書かれている。ミットラーも常にあわただしく、登場し、エドアルトとシャルロッテの関係を良くすることには貢献せずに、子供の洗礼の時の長々とした演説で牧師の死をもたらし、最後のオティーリエへの死の直接原因を作り出す。老人の書記はせきたてられ、多くの仕事を与えられると何も出来ないが、ゆっくり仕事をさせれば、たくさん仕事が出来ることが判明する。物事は性急に進めてはうまくいかず、時間をかけてゆっくり進めなければならないことが示されている。エドアルトとオティーリエ、シャルロッテと大尉の間に恋愛感情が生まれつつあるとき、理性的な大尉ですら時計を巻くのを忘れてしまう。恋愛に夢中になり、冷静さを失い、知らぬ間に時間が過ぎていくのである。時間がどうでも良くなり、老人の書記に自分たちの仕事まで押し付けたことを忘れる。シャルロッテの子供の溺死もオティーリエがエドアルトとの再会した時、夢中になり、時間を忘れ、日暮れになり、急いで湖を渡って帰ろうとしたことが原因である。

「庭師は趣味や道楽によって本業をおろそかにしてはいけないうと同様に植物も常時の完成か、一時の完成かに達するためにはその静かな歩みを中断されてはならない。植物は頑固な人間に似

ていて、それに応じた取り扱いさえしてやれば、こちらの言うことは何でも聞いてくれる。見守る目と、どんな季節どんな時にも最善の手当てをするという落ち着いた一貫性、これが一番必要なのは庭師である。」(423 f)

庭師の植物の世話についての考えは人生に対する態度についても示唆している。ここには自然の世界と人間の世界は同じであるというゲーテの考えが見いだされる。

(3) 拡大

生活空間を拡大させたことが彼らの挫折と不幸と関連している。時代の変化の中で自分の人生を拡大するか、縮小するかが問題になる。

「時代は流れ、それと共にものの見方や考え、先入観、趣味も変わります。息子の青年時代がそういう転換期の時代にありましたら、その息子が父親とは共通するものを持たないことは確かです。父親の時代には皆、多くを自分のものにして、それを確保し、生活を制限し、狭い範囲で暮らし、世間から離れて生活を楽しむことを考えていたとすれば、息子の時代には膨張し、分かち与え、拡大し、閉ざされていたものを開こうとするでしょう。」(417 f)

エドアルトはシャルロッテとの二人きりの幸せな生活に満足せずに大尉を呼ぶ、シャルロッテもオティーリエを呼ぶ。これは二人の生活から四人の生活への拡大である。同時に彼らはエドアルトの父の建てた屋敷から苔小屋、別邸を建て、領地の生活空間を広げる。

拡大することで人間は制約されず、自由に解放的になるが、同時に生活、経済の安定性を失う。開放的になることにより、新しい恋愛感情が生まれ、エドアルトとシャルロッテの結びつきは不安定になる。別邸に移り住むことや、三つの湖をひとつにしたことはシャルロッテの子供の溺死と間接的に関連している。⁸⁾

3. 人生、時代の変動と永続、継承

人物たちの自然、人生、社会の秩序づけ、形成化は成功することなく、最終的には挫折する。彼らの活動には色々な問題点があるが、結局、それは全能ではない人間の弱さ、限界から生まれるものである。人間が自由に自然、人生を形成しようとしても避けることの出来ない問題として人生の変動、社会や時代の変動がある。自然が変化、消滅するように人間の人生も変化、死をまぬかれることはできない。親和力が書かれた時期(1809年完成)がフランス革命後の変動の時代(1806年フランス軍ドイツへ侵攻)であることもゲーテの人生観に大きな影響を与えたことは否定できない。1801年、1805年の病気、その間の鬱の時期、1803年のヘルダーの死、1805年のシラーの死、1808年の母親の死、クリスチーネ・ブルピウスと七年間の同棲生活後に結婚などゲーテ自身の人生においても様々な出来事のあった時期である。⁹⁾

『親和力』は中年の貴族夫婦の壮年期の平穏で幸福な日常生活から始まっている。エドアルトとシャルロッテは若いころに愛し合い、結婚する予定であったが、実現できず、別な人と結婚し、

中年になり、それぞれの配偶者がなくなり、再婚し、若いころの夢を実現する。物語はやっと実現された幸福を強調する形で始まる。

「4月の午後の最も素晴らしい時間」「男盛りに」「満足して」「喜び」など人生の頂点であるかのように描かれている。¹⁰⁾

伯爵と男爵夫人についても人間としての円熟、洗練さが述べられている。

「伯爵も男爵夫人も、若いころよりも中年になってから、好ましい印象を与えるタイプの上品な美しい人物に属していた。青春の若さは幾分、失われてしまっているが、好感と共に、深い信頼を感じさせるタイプである。この二人も会ってみると大変、感じがよかった。人生の諸問題を取り上げ、論じる態度、明朗さ、こだわりのなさ、すぐに相手にも伝わり、気品が全体を包み込み、押しつけがましきは少しも感じさせなかった。」(307)

ゲーテの教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』は主人公ヴィルヘルムが青年として自分の狭い家を出て、広い世界で色々な人物と出会い、様々な経験、失敗を経て、人間として成長する物語である。それに比べると、『親和力』の主要登場人物でオティーリエを除くならば、エドアルト、シャルロッテ、大尉、伯爵、男爵夫人はみな、壮年期の人物である。若いころに色々な人生経験をし、いわば、成熟し、安定した人間である。

様々な人生経験をjて成熟した人間は間違いを犯すことなく、失敗や波乱なく、平穏な人生を送ることが出来るように見える。しかし、そうならない形でこの小説は展開する。

「私たちは遠くにいる友達や愛している友人がどうやら、幸せに暮らしているとばかり信じていますと、いつの間にか、その友達の生活が不安定になりはじめ、また人生の新しい道を、おそらく、また不安定な道をたどらなければならないことを聞かされなくてはならないのは悲しいことです。」(308)

このシャルロッテの言葉はかつての社交界の友人たちについて述べていることだが、このことが彼女自身のその後の人生そのものに当てはまる言葉になっていることは皮肉である。伯爵は男爵夫人との不倫の関係を正当化するように結婚の永遠性を疑問視する。

「私たちはこの世のことを、特に結婚による結びつきを永続的なものと考えがちなのです。私たちは何度も見ている喜劇にだまされ、結婚が長続きすると思ひ込むのです。しかし、その思い込みは現実とは一致しないのです。喜劇では結婚はいくつかの幕の障害を通して引き伸ばされますが、しかし、その願いは最後にはかなえられます。最終目的に到達した瞬間に幕は閉じ、その時の満足感はずっと残ります。しかし、現実は違います。幕の背後で結婚生活は続くのです。幕が再び、上げられるとき、誰もその結婚生活の続きを見たり、聞いたりしたいとは思わないでしょう」(309)

「結婚生活で不都合と思われるのは、この世の多くのことが変化してやむことがないのに、結婚生活にのみ永続性が要求される点です。」(309)

『親和力』はエドアルトとシャルロッテが「いくつかの幕の障害をへて引き伸ばされた念願の最

終目的」である結婚に到る物語ではない。結婚にゴールインした時から物語は始まる。結婚はゴールではなく、物語の始まりである。それは同時に人生、愛には最終ゴールはなく、常に変化、不安定の危険にさらされていることを示している。

人生、愛の不安定さ、変化だけではなく、死についても述べられている。

「崩れ落ち、教会に来る人たちに踏まれて磨り減ってしまった墓石、墓碑の上に崩壊している教会などを見るたびに、死後の生は私たちがこれから肖像とか墓碑銘とかの形でその中に入って行く第二の人生であり、今の生きている人生よりも長くその中に留まるのだと思わざるをえない。しかし、この第二の存在の形象も、遅かれ早かれ消えてしまう。時というものは、人間と同様に記念碑の上にもその権利を容赦なく行使することやめない。」(370)

人生だけではなく、時代の変化、変動も強調されている。化学会話での理論がすでに古いかもしれないという指摘、学問が急速に進歩していること(270)、最近の果樹栽培の変化についていけないという庭師の発言(350)など時代の急速な変化に適応できないことが描かれている。

建築家の古代の原画のデッサンをきっかけに現代と過去が比較され、古代、中世の絶対者を信じる幸せな世界は現代では不可能になったことが述べられる。

「どの人物からも純粹存在が輝き出ている。皆、高貴でないとしても善良であった。明朗な心の集中、私たちの上に君臨する絶対者をつつましく、喜んで認めている様子、愛と希望をもって静かに身を捧げている感じがどの顔、身振りにも現れていた。」(367)

また、芸術作品と芸術家の関係にも話題が及び、現代では芸術作品は芸術家の手を離れ、芸術家が自分の作品を享受できないことについても嘆かれる。

「芸術が公共的なもの、すなわち、すべての人間のもの、したがってまた芸術家自身のものであるものだけを生み出すことが出来た時代においては、芸術はいかにのびやかに振舞えただろう。」(375)

時代、結婚など物事の変化、無常さ、死は避けることの出来ないものとしてただ、嘆かれるのではない。それを恒常的なもの、永続的なものにする試みについても話題になっている。例えば、結婚制度は愛の移ろいやすさ、不安定さを法律によって確固たるものに、安定したものに。別邸の定礎式の際に左官は礎石と大地の結合のために漆喰の役割を結婚制度に比較して次のように述べている。

「自然に好意を寄せ合っている人間も法律によって縛られることによっていっそう硬く結びつくように、最初からかみ合うようにできている形の石も漆喰という接着剤によってもっとよく、結合するのです。」(300)

結婚制度は法律として、外側から愛を安定し、確固たるものにし、結びつきを強くし、離れられないものにする側面を持つ。しかし、他方、伯爵の結婚についての考えの中で出てきたように、制度によって安定した愛は相手に対する配慮、思いやりを失い、徐々に変質し、がさつなものになる。伯爵は友人の結婚の五年限論を紹介する。結婚は永遠の誓いではなく、五年の期限を決

めたほうが良いというのである。

「五という奇数は神聖で、男女が知り合い、子供をつくり、その後、不仲になっても、素晴らしいことにまた和解しあうのに十分な年数です。」(309)。

五年という期限を設けることで安定した結婚生活から生まれる無神経さが押さえられ、不仲になっても期限が近づくとつれ、相手への思いやりが生まれ、愛を持続させ、そしてそれは期限の更新をもたらすことになる。伯爵の友人は主張する。

時代が変わるとき、古いものを保存、また古いものと新しいものをどういう風に結びつけるかが問題にもなる。建築家が教会の改築のために色々な過去の遺留品、墓碑、容器、武具を持ち出してくるときは過去の保存、継承が問題になる。過去と現代の継続性、現代と将来の継続性、言い換えれば永続性が重要になる。自然の永続性、人間の永続性をいかに作り出すかが問題である。物語の最初でエドアルトが接ぎ穂を若い台木に接ぎ木している行為は象徴的である。拡大の時代と緊縮の時代、父の世代と子の世代の継承の問題になるのである。それはまた、過去、現在、未来をいかにつなげるかの問題とも結びついている。別邸の定礎式では礎石を置き、そこに記念品を収めるときは後世への伝達が問題になる。

イギリスの貴族はすべて息子のために努力し、家や土地を残してやりたいと思い、生きてきたが、結局、息子は親の望みに応じることなく、インドに行ってしまう。自分の後を継ぐ人間がいなくなり、イギリス貴族は自分の家に住むのではなく、世界を渡り歩く旅行者としての人生を選ぶ。定住、安定を人生の本質にするのではなく、変化を積極的に人生の本質にする生き方である。

『親和力』は春に始まり、夏、秋、冬と一年が過ぎ、次の年の秋で終わる。季節が移り変わるように人生も変化していく。自然が生成と消滅を繰り返し、常に変化しているように人生も誕生、成長、成熟、老化、死を繰り返す。変化はすぐに気づかれることなく、ゆっくりと進展する。シャルロッテは次の年の春に別邸の周りの自然の美しさに感動する。

「あたりは予想したよりもずっと美しくなっていた。回りの小さな目障りになるものはすべて取り除かれていた。自然と時が風景に与えた美しさが純粋な姿で浮かび上がり、目を楽しませた。」(428)

ここでゲーテは時の変化は決して断絶、変化、滅亡を意味するのではなく、人間が適切な取り扱いをすれば、永続、成熟、再生をもたらすことを述べている。

4. 愛

『親和力』では心が傷つけられる場面が頻繁に出てくる。シャルロッテは大尉に自分の庭造りを批判されて傷つく。(263) エドアルトはきれいに書き上げた大尉の地図に勝手に印を汚く書き込み、大尉は心をえぐられる。(295) エドアルトはオティーリエから大尉が自分のフルートの演奏で悩まされていることを聞き、侮辱されたと思い、ひどく憤る。(330) ルチアーネは引きこもっている精神病の娘を無理に社交界に連れ出そうとし、傷つけてしまう。(400) 建築家は自分の持つ

ている芸術収集品を人がどんなに無作法にさわるか、それを見るといかに心が傷つくかをオティーリエに話す(401)。イギリスの男爵はインドに行った息子について嘆くが、それは同じ状況のシャルロッテの心を傷つける。(432) モーゼの十戒の第六の戒め「汝、姦淫するなかれ」についてのミットラーの長広舌は正当であってもオティーリエの心を決定的に傷つけてしまう。(483)

人は他者との付き合いにおいて相手の気持ちを考えずに自分勝手に振舞い、相手の心を傷つけてしまう。傷つける意図があるわけではないのに傷つけてしまう。それは人との交際において結局、人は自分を中心に振舞ってしまうことに原因がある。自己を中心とする振る舞いはその意味では自然で必然的である。相手を傷つけないためには、相手を気遣う繊細さが必要である。自己中心の粗野な振る舞いは礼儀として相手を思いやる振る舞いへと形成されなければいけない。

「心の礼儀というものがある。それは愛に似ており、外面的な振る舞いのもっとも心地よい礼儀はそこから生まれる。」(397)

人間が交際するときの礼儀の欠如のみならず、オティーリエの日記では人間が自己を中心としてしか、相手のことを考えられないことが批判されている。

「私たちは自分が恩恵を与えた人と会うとすぐ、それを思い出す。一方、こちらが恩恵を受けた人の場合はそれを思い出さないことが多い。」(384)

「気持ちを語ることは私たちの自然な本能である。語られることをそのまま語られるとおりに聞くことは教養である。」(384)

人間は他者の立場に立つことは難しい。恩恵を与えたことが記憶に残り、受けたことは忘れる。自分の気持ちを語ることをだけを考え、相手の語ることを自分勝手に理解する。

シャルロッテは故人の肖像についての話から、人間が過去に色々な人に出会っても、その人から何も学ばず、表面的な付き合いしかせずいつまでも他人のままで冷淡であったことを嘆く。(365) また、寄宿学校で冷遇されているオティーリエを助教師が愛情を持って見守っていてくれることを有難く思う。

「人間同士の無関心や憎しみに満ちているこの世で真の愛情がどんなに尊重すべきものであるかをシャルロッテは今日まで十分、経験してきたからである。」(266)

人と人との付き合いでは皆、互いに無関心で自分勝手に、相手を思いやることなく、傷つけあい、理解することなく、批判し、お互いに憎みあい、冷淡である。オティーリエがいた寄宿学校はまさしく、そういう世界である。シャルロッテは寄宿学校を出たオティーリエに母親のように接する。オティーリエはエドアルトを愛し、エドアルトに愛され、彼女は新しい世界で初めて生き生きとした人間に変わる。

「愛する人のことを考えると彼女はこの世の中のどんなことも関連するように思えた。そして、彼なしで物事がそもそも関連しうるとは理解できなかった。」(414)

イギリス人男爵もまた、愛する息子が外国に行き、自分の家や土地を引き継ぐ人間がいなくなっ

たとき、自分の人生のむなしさを感じ、異郷をさ迷い歩き、旅人として生きる。(432)

『親和力』はエドアルトとオティーリエの愛を中心にさまざまな愛の形を描いている。愛は決してそのままの形で美しいものではない。愛はエドアルトやルチアーネの例に見られるように自己中心的で相手に対する愛というよりも自己愛の形で現れる場合もある。

「人間は本当にナルシストだよ、すべてのものに自分の姿を映してみたがり、自分を全世界に押しつけるのだ。」(270)

自然や人生が秩序づけられ、形成されなければならないように、愛も育成されなければならない。愛はまた、育成されなければ、時が経つにつれ、自然に変質し、消えていく。このことはエドアルトとシャルロッテの場合に当てはまるだろう。シャルロッテはエドアルトとの愛を大事に育てようとする意志があるが、エドアルトにはその意志が欠けている。

エドアルトのオティーリエへの愛はたとえ、かれが「愛する力で僕よりもすぐれた者があったら、その人を見たいものです。」(355)と言っているにせよ、シャルロッテ、大尉と比べたら、自分を見失った貴族の身勝手な愛でしかない。裕福な貴族として、本来なすべき仕事を持たずに暇で退屈な日々を送っているエドアルトにとってはオティーリエへの愛が唯一の生きがいである。¹¹⁾彼はオティーリエのために戦争に出征して命をかけようとする。エドアルトの愛は独りよがり、かれは最後まで自分を中心にしか、考えることができない。しかし、エドアルトはゲーテによって完全に滑稽な人物として描かれているのではない。かれのどうしようもなさや彼の甘やかされて育った環境からも説明されている。また、愛はゲーテの実人生においても非常に重要なものであったことを考えれば、彼はどうしようもない人間として描かれているが同時に憎めない愛すべき人間として作者ゲーテ自身によって見られていることも確かである。¹²⁾

また、彼の盲目的、自分勝手な愛がこの小説全体の出来事を動かしている。周囲を省みないエドアルトのオティーリエへの盲目的な愛がなければ、この小説は成立しない。その意味においてエドアルトの盲目の愛はこの小説の構成上、不可欠になっている。

ルチアーネの愛し方もエドアルトと同じく、独りよがりの愛である。彼女は女王的存在としてすべての人間を自分のファンにするために他人の誕生日や名前日を覚える。人のうぬぼれをくすぐり、心に傷があり自分に閉じこもっている人間を社交界に引き出そうとするが最後に致命的に傷つけてしまう。彼女の愛は本当の愛ではなく、あらゆる人に自分の魅力を強引に認めさせようとしているだけである。エドアルトと同じく、わがまま勝手な自己陶醉が見られる。ルチアーネは「すべての人間の状況を滑稽な面からしか見ることが出来ない。」(387)人間であり、彼女が他者のためにしている行為は結局、自己顕示でしかなく、他者への真の思いやり、愛が欠けている。

一方、オティーリエの愛にはエドアルトやルチアーネの愛とは違い、利己的な側面は見られない。彼女の愛は自己献身的、利他的な愛であり、自己愛は少しも感じさせない。

シャルロッテもオティーリエと同じように自己中心的な振る舞いをせず常に他者を気遣っている。シャルロッテは人と人との結びつき、社交が円滑に行くように常に配慮しているが、他方、

オティーリエは社交には消極的で他者に対して献身的に仕える。彼女は相手が何を望んでいるかを理解し、即座に反応し、静かに動く。ルチアーネの自分勝手な騒々しい振る舞いとは正反対である。

「オティーリエのまめまめしさは日ごとに増していった。家の中、人々、人間関係のことを知るにつれて、オティーリエは生き生きと動き、人々の一挙手一投足、まだ、口に出るか出ないかの言葉や音ですらも、すぐに理解するようになった。オティーリエの物静かな気配りは、その落ち着いた動きと同様に変わることはなかった。座る、立つ、来る、取ってくる、運ぶ、また座るなど、オティーリエの動作には騒々しさは全然感じられず、すべてが永遠の行き来であり、永遠の心地よい動きであった。それに誰も彼女の足音を聞かなかった。それほど物静かに振舞った。」
(284)

オティーリエはほとんどの男性の心をひきつける。助教師は最初からオティーリエに対して教え子以上の関心を抱き、将来の自分の伴侶にしたいと考える。(412) 伯爵もオティーリエに愛情を感じ、自分の娘のように感じる。(413) オティーリエの目の美しさも強調されている。エドアルトも大尉もオティーリエの目の美しさ、その内面的輝きに惹かれる。(253, 283), 建築家もオティーリエの優しい情愛に満ちた目の美しさから離れられなくなる。(402)。

オティーリエの美しさは内面から来るものであり、それが美しい形象として目や動作、振る舞いに現れるのである。¹³⁾ 他方、ルチアーネの美しさは表面的美しさであり、高慢、我儘と結びついている。

オティーリエは食事もわずかしかとらず、無欲でほとんど自分のことを考えない。他人から何かを求められるときも断るのが出来ずに祈るような動作をする。(284) 自己顕示ができないために学校の成績を伸ばすことができない。つねに他者に仕えようとして、他人が求めているものをすぐに理解する。自分よりも他人の可能性を生かすことにおいて、助教師が言うようにオティーリエは教育者に適している。実際、彼女は村の少年、少女の教育に携わる。エドアルトの拙劣な演奏の仕方への同化、エドアルトの字体の模倣など自分を捨て、他者に自分を同化させることに喜びを見出す。シャルロッテはオティーリエの献身的行為に感心するが、男性に対してはそういう行為は誤解を生み、ふさわしくないと非難する。オティーリエは弁解するように「失脚したチャールズ1世が裁判にかけられたとき、杖の握りボタンが落ちても人民の誰も拾わず、王自身が拾った。」という話を聞いて胸を締め付けられる思いがしたと話す。それまで皆が王をわれ先と助けてあげていたのに急に冷たい反応をしたことがオティーリエに悲しかったのである。(284) オティーリエは相手が失脚した人間であろうとも、困った人間を助けてあげたいのだ。オティーリエの愛は利害や自己愛を含む自己中心の愛ではなく、絶対的献身の愛である。建築家は礼拝堂の修理の際に古代、中世の人たちの絶対者を信じる敬虔、清純、つつましき、純潔の表情を描いた原画の写しを見せるが、オティーリエはまさしく、中世的な人間として描かれている。

「多くの人々はたぶん、このような世界を消え去った黄金時代、失われた楽園のように眺めるだ

ろう。ひょっとしてオティーリエだけがそのような世界を自分の世界のように感じる事が出来たかもしれない。」(368)

エドアルトとシャルロッテの関係は対等であるが、オティーリエの愛は他者との平等の関係に基づくものではない。¹⁴⁾ 献身的に他者のために尽くすオティーリエの愛は絶対者を崇拜する宗教的愛であり、近代の男女の愛とは異なっている。

ゲーテは結局、オティーリエを聖女のように描いている。建築家に頼まれ、オティーリエは活人画の聖母を演じる。そしてオティーリエの姿、表情、まなざしは過去の画家が描いたものをすべて凌駕する。(404)

死後、オティーリエは多くの人の病いや苦しみを癒す聖女として崇拜される。オティーリエの棺は死後にエドアルトの棺と並べられるが、彼女の愛や彼女の教育者としての可能性はこの世では実現されるには至らなかった。寄宿学校でも自分の能力を発揮できず、大人の新しい世界では皆から愛され、屋敷内の家事や植物の世話など色々と活躍するが、最終的には愛の犠牲になってしまう。オティーリエという美しく、清純で利他的な存在が自己形成されずに、結局、死を選ばざるを得なかったことはまさしく、親和力の悲劇性を表している。しかし、オティーリエだけではなく、子供の溺死、エドアルトの死、一人残されたシャルロッテの不幸など結局、人間は親和力という自然の必然的法則に翻弄されてしまったことになる。

化学会話でシャルロッテは物質と他の物質の結びつきは必然ではなく、偶然の機会の問題だと言い、その以上にそれは結局、それを操作する化学者の手に握られていると述べている。(274) シャルロッテはすなわち、ある出来事が起こるのは必然的でなく、それをたまたま、可能にする状況、機会があつて初めて生じるものであり、出来事は偶発的な機会がなければ、起こらず、それは必然ではなく、偶然の出来事ではないかと反論する。そして化学実験の場合はその偶然の機会を生み出しているのは化学者であると言う。つまり、すべてを動かしているのは実験をしている化学者なのである。このことをこの『親和力』という小説に当てはめるならば、この小説の出来事をすべて操っているのは作家ゲーテである。『親和力』の登場人物が自分たちの人生、自然を形成しようと試みるのと同様にゲーテはこの小説の出来事、人物などの創造し、悲劇の世界を作っている。人物がどのように考え、どう行動するか、出来事がどうなるかはすべて作者自身の手に握られている。悲劇という小説の構成上、人物は親和力という自然の必然的法則に支配される結末が必要である。実際の現実、人生がそうになっているというのではない。¹⁵⁾ この小説では人間の自然形成、人生形成、結婚などの試みが結局、挫折し、失敗してしまうが、それは悲劇としてこの小説の構成上、そのような終わり方になるのであって、人間のそういう試みが意味のないものと考えられているのではない。自然、人間、人生、愛が形成されなければならないことは当然のことである。しかし、作家ゲーテにとってそれらをテーマにした芸術世界の形成が最も重要である。『親和力』は現実の自然の世界を芸術世界へと美的に昇華させた世界である。この小説で描かれた世界は現実の世界に似ていながら、同時に芸術の完成された悲劇世界であることを忘れてはいけ

ないだろう。

注

本文の括弧の数は、Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden hrsg. von Erich Trunz, Band 6, München 1982 からの引用ページを示す。

- 1) Jeremy Adler: “Eine fast magische Anziehung“ Goethes Wahlverwandschaften und die Chemie seiner Zeit. München. 1987 は当時の化学の歴史を詳細に調べ、この小説を主に化学の観点から分析している。
- 2) Metzler Goethe Lexikon, hrsg von Benedikt Jeßling, Bernd Lutz und Inge Wild, Stuttgart 1999. S. 86
- 3) Goethe Handbuch Band 3; Goethe Handbuch in vier Bänden, hrsg. von Bernd Witte. Stuttgart, S. 176
- 4) Goethe Werke. Hamburger Ausgabe, Band 12. S. 388
- 5) Elisabeth Hermann: Die Todesproblematik in Goethes Roman ”Die Wahlverwandschaften.“ Berlin 1998. S. 202
- 6) Werner Schwan: Goethes Wahlverwandschaften, Das nicht erreichte Soziale.— München. 1983. S. 148-160
- 7) Elisabeth von Thadden: Erzählen als Naturverhältnis ”Die Wahlverwandschaften“ München 1993. S. 133f
- 8) オテューリエが別邸のシャルロッテのところへ帰ろうと大きな湖を急いで小船で渡ろうとしたことが子供の溺死の原因である。
- 9) Vgl. Goethe Handbuch, Band 3. S. 153
- 10) Friedrich Nemec: Die Ökonomie der Wahlverwandschaften, München 1973. S. 22
- 11) Vgl. 2). Metzler Goethe Lexikon. S. 522 「親和力は18世紀後半ドイツの荘園貴族の状況をテーマにしている。彼らの非生産性は特にエドアルトの例で明らかになる。かれは素人として音楽をやり、自分の荘園を経営し、土地の一部を売り、より大きな、より美しい庭園を造ろうとする。かれは「修業時代」に出てくる封建制の領土を社会的責任から解体する改革の貴族とは全く別なタイプである。」
- 12) ゲーテはエドアルトに対して「エドアルトは無条件に愛するがゆえに貴重な存在である。」と述べる一方で、「エドアルトは耐えられない存在だ、なぜなら、独りよがりな性格そのものになっているからだ。しかし、事実を浮き立たせるために彼をそういう人物にせざるを得なかった」という発言もしている。Vgl. 6) S. 119
柴田翔「内面世界に映る歴史、ゲーテ時代のドイツ文学史論」の386ページ参照
- 13) Vgl. Heike Brandstädter: Der Einfall des Bildes, Otilie in den>Wahlverwandschaften<. Würzburg. 2000 はオテューリエの形象性だけでなく、「親和力」全体を形象性の観点から解釈している。
- 14) Susanne Konrad: Goethes>Wahlverwandschaften<und das Dilemma des Logozentrismus. Heidelberg. 1995 S. 204 はゲーテが知的に同等な女性とは関係持たずに、身分の低い、あまり教養のない、性的魅力のある女性を愛したこと、世故に長けた、洗練された女性は愛の対象にならなかったことを指摘している。
- 15) ゲーテは芸術の真実と自然の真実を明確に区別する。ゲーテ全集13。潮出版社。1994年。154ページ。

親和力は悲劇の結末になっているが、実際の人生は偶発性に満ちている。シャルロッテの考察「人生は損得の帳尻が合うように出来ている。何かを計画し、それを邪魔されない人がいるだろうか？ある道を選んだとしても、それからそらされてしまうことが何と多くことか！ はっきりと見定めた目標からそらされても結果としてより大きな目標に達することが何と多いことか！ 旅人は途中、馬車の車輪が壊れ、うんざりするが、この不愉快な偶然によって誰か良い人たちと知り合い、つながりを持つことになり、それが彼の全人生に良い影響を与えるということも起こる。運命は我々の願いを叶えてくれるが、我々の願い以上のものを与えるために、運命独自のやり方をするのである。」（428）がゲーテ自身の人生観に近いように思われる。われわれは人生を思う通りにできない、また、人生には何が起こるか分からない。しかし、運命（より高い存在）は結局、われわれをより高い目標へと近づかせるという人生観である。